

．．．．は し が き ．．．．

## 白鳥はなんだろう

日本白鳥の会会長 家 田 三 郎

白鳥をどんな風に見てきたのだろう。

昔のことは殆んど知らないが、白鳥を神として祀っている「白鳥神社」のことはよくきくし、そういう神は、アイヌの人たちと関係するということもきかされる。

「ヤマトタケルノミコト」が亡くなれると白い鳥となって山の彼方へ行かれたとか、國のまほろばをめざされたとかもきくが、今の私たちに、何かその心持が理解しにくいようにも思う。それは、吉川重三郎の餌づけにはじまった敗戦後の考え方や、さらには自然科学からでてきた自然保護の考え方に強く結びついているように思う。

西欧やシベリヤのことはなおのこと知らないが、シベリヤとかロシアには白鳥にまつわる物語が多いこともきかされる。「瀕死の白鳥」というアンナパブロバの舞は超物理的な姿があるとか、しかも死という詩でもあろう。この白鳥の死という思いは、どうも西欧のもののようにとれる。

オセロの科白の中に、デスデモナの死顔を白鳥に見たてているのがあったが、こうした思いは日本とは違うように思った。

結局、現在のわれわれは白鳥の死を見つめるよりは、白鳥の楽園を見、白鳥のなかに悲しさを見てはいない。白鳥の神秘を見ない。

しかもわれわれにとって白鳥はひどく身近かで、すぐそばによってきて餌さをたべるといふ全くの友人になってしまった。

それもこれも、天さかる鄙の爺、吉川重三郎の行動によるものと思う。どうであろうか。

もっともこのごろ神さまの数も少なくなられたのかとも思われる。

重三郎は「人間も白鳥になれ」といったようにいわれているが、繁男はむしろ白鳥を人間にしてしまっているようにも思う。

「白鳥」そこから死という考え方がでてくることに私はむしろひかれるのだが。